



クロストーク ナガサキピースミュージアム × 公害資料館

ナガサキピースミュージアムを訪れて

(林) 常設展がないということに、びっくりしました。全くないわけではなく、少しはありますが。それから「あ、平和なんだ、そういう切り口なんだ」と改めて思いました。「ナガサキピースミュージアム」だから「ピース」なんですけど、訪れて納得しました。展示を月1回入れ替えて、いろいろなことを学べる場をつくり、話し合えるようにされている。語り合えるような場が必要なんだと重要視されていることに感銘を受けました。

平和を目指して芸術ができることがあるということで、モニュメントを見せていただいて「ああ！」って思ったんですが、平和を実現するっていうことは、戦争がないことだけではなくて、公害も同じであって、そういう部分で言えば、SDGsという概念を使えばつながっていくんだろうなというのをしみじみと感じていました。

公害反対運動で「戦争こそ最大の公害である」とスローガンがよく使われるんですけど、本当にそこなんだと、私は感じました。

(大串) そうですね。うちの場合は、反戦・反核とか、あまり難しい政治的なことはあまり押し出してないんで、身近な誰でも共感できるようなところから、そういう平和を考えていただく場を提供しようという形でやっております。なので、すごく緩い平和だろうと思います。

公害資料館パネルを見て

(大串) 7枚によく集約されているなと思いますね。公害の背景であるとか、被害者の方々の活動、対応など流れがわかって、その上で、それぞれの公害資料館へのアプローチと

共通パネルは、個別の公害ではなく公害に共通するもの何かを2016～2018年にかけて議論をして作成しました。7枚で構成されていて、「なぜ今、公害から私たちは学ぶのでしょうか」からはじまり、「なぜ公害は生じたの」と続きます。公害は、戦争が非常に大きく影響しています。戦後復興が推進されるなかで公害が発生し、公害被害者が生まれる。

しかし被害者の声が届かない、そうした声をどう届けるか、支援者や司法への訴え、そして救済制度が作られる。しかし、制度から漏れてしまう人たちがいる問題、そういったことが書かれています。

また、公害が発生しないための環境アセスメントや、SDGs。「誰も取り残さない」ということが、被害者の声を取り残さないということにつながることを、そして各地にいろいろな公害資料館があることを説明しています。

戦争の被害があり、そこからの復興を推し進めていく。こうしたベースが各地にあることに、パネルを作るための議論の中で気がついていきました。戦争ということと、公害というのは切り離せない問題ですね。議論し、作成していくことは、とても大事だったと感じています。

意外にも、作成した後は、すんなり受け入れられました。作るまでは、喧々諤々、館として、各地の公害地域として伝えたいことがいろいろあって大変でした。ただ、違うことはいろいろあるけれども、それでも未来に向かって共通点というものはある。だから一緒に考えていこうとなっていたのではないのでしょうか。SDGs へもつながりやすかったのではないかと思います。

共通点を探し、整理したことで「あ！なるほど、自分たちの公害の背景には、こういうふうなことがあったんだな」ということが理解しやすくなって、ちょっとした道標になったとしたらうれしいことです。

して良いんじゃないかなって思います。

SDGs は、パートナーシップであるとか、誰一人取り残さないというスローガンで記憶されますが、目標の中身は、健康と福祉とか、海や陸の豊かさ、つくる責任・つかう責任など、いろんな分野があって、それと各地の公害をあてはめてみると、たくさんあてはまる場所があると思うんですね。そういったところを、今後ずっと貴重な経験をどうあてはまるかを議論していけば、SDGs の精神にもつながるのではないかなと思います。公害資料館も、各地の経験の継承と同時に、将来の SDGs の発信の場になってもらえればいいんじゃないかなと思います。

参加者とのクロストーク

はじめに、五十嵐実さん(日本自然環境専門学校)の「被害にあった方が亡くなっていく状況で、どのように伝えていくか。長崎での戦争・原爆に対する捉え方はどうなっているのでしょうか」という問いかけに、大串さんからは、語り部が減っていることへの危機感があり、映像でアーカイブとして残す活動や、朗読会や紙芝居で伝えていく活動、「平和案内人」を市民から募って研修をして、案内・説明できる人材を養成する活動など紹介がありました。また、長崎出身の参加者や、長崎大学の学生から自身が受けた平和学習についてお話いただきました。司会の友澤さんからは、長崎の地元のニュースや新聞の紙面を見ていると、戦争・原爆を取り上げる機会は、首都圏に比べればまだはるかに多く保たれており、心強く感じているとのお話がありました。

林浩二さん(千葉県立中央博物館)からは、現代美術家の宮島達男さんが取り組んでいる「時の蘇生・柿の木プロジェクト」に関して、被爆柿の木2世の植樹に関わる方々の中では原爆だけでなく、普遍的な平和が語られていることの紹介があり、植物のもつ強靱な生命力は、様々な教育の場で生かせるのではないかと、「当事者語り部だけが語り続けられるわけではない」ことに対応する仕組みを、我々はうまくつくっていかなく

ばならないのではないかと提案がありました。

水俣の森山亜矢子さん(環不知火プランニング)からは、ドイツとポーランドの関係性をふまえ、日本はどうか？水俣でも小学生に政治的なことはどうかといった話もあるが、「子どもの成長過程に合わせて平和や公害をどう伝えるか、そのあたりどのように思われているか」という問いかけもありました。

「NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」を立ち上げ活動されている栗原淑江さんからは、「公害と原爆とのつながり、その根本のところには戦争があるというご指摘に共感し、やはり公害も原爆も、戦後社会のこの日本の社会のあり方を根本から問い質している問題だろう」という発言とともに、「公害・原爆ともに今ある制度の根本に、国や企業の責任が本当に位置づけられているか疑問である。これから私たちはどうしていかなければいけないかを一緒に考えていかなければならないと思っています」とコメントをいただきました。

一方で、高木勲寛さん(神通川流域カドミウム被害団体連絡協議会)からは、戦争と公害のつながりはもちろんあるけれども、公害資料館ネットワーク、連携フォーラムで扱うことについての懸念が語られました。政治的に利用されないよう、公害資料館ネットワークとしては、しっかりと公害を伝えていくこと。その中には戦争とのつながりもあったということではないだろうか。また、イタイイタイ病に関して、語り部が少なくなっていることや、対象にあわせてどこまで話していくかなど取り組んでいるが、他地域の事例を知り、学んでいきたいとの発言がありました。

他にも、金鏡仁さんからは、「韓国を含め、他の諸国との連帯活動をも願いたい。韓国にもナガサキピースミュージアムや公害資料館のことを伝えていきたい。各地の公害資料館のWEBサイトに韓国語の説明もあり、わかりやすい。ずいぶん前からありがたいなと思っていた。」とのコメントがありました。イタイイタイ病の資料館ではロシア語を含め5か国語で発信していることや、海外の公害資料館の把握まではできていないことなど、林美帆さんから説明がありました。